

「初等体育科内容構成研究」授業実践報告

—教科内容構成研究と教科教育法とのつながりをめざして—

廣兼志保*

Shiho HIROKANE

A Practical Report on "Study on Teaching Contents of Physical Education in Primary School"

—A Practice to Form Connection between "Study on Teaching Contents of Physical Education" and "Physical Education Pedagogy"—

1. 「初等体育科内容構成研究」の位置づけと運営形態

(1) 「初等体育科内容構成研究」の位置づけ

本稿で実践報告を行う「初等体育科内容構成研究」は、教育学部において初等教育開発専攻及び健康・スポーツ教育専攻の専門科目として開講されている。初等教育開発主専攻及び副専攻の学生は、「初等教科内容構成研究」という授業科目の分類の中で、音楽科・図工科・体育科の3教科のうち1科目以上の内容構成研究の授業を履修する。また、健康・スポーツ教育主専攻の学生は、「保健体育科内容構成研究」という授業科目の分類の中で、5つの授業科目から3科目を履修する。本授業はそのような枠組みの中に位置づいた選択必修科目である。

(2) 「初等体育科内容構成研究」の運営形態

「初等体育科内容構成研究」は前後期反復授業として開講されており、週1回、90分間の授業である。

この授業は、初等教育開発講座に所属する体育科教育担当教員1名、健康・スポーツ教育講座に所属する運動領域担当教員3名、健康・スポーツ教育講座に所属する保健領域担当教員1名の計5名が協同して担当しているオムニバス形式の授業である。初等教育開発講座所属の体育科教育担当教員が授業全体の運営をとりまとめている¹。

授業では、講義・実技の実習・学生間でのディスカッションなど、グループ活動をまじえ、学習内容に応じた様々な形態で学習がすすめられている。運動領域の授業は実技の実習を中心に、保健領域の授業は講義とディスカッションを中心に、ふりかえりとまとめの授業は個人作業とディスカッションを中心に学習がすすめられている。

2. 「初等体育科内容構成研究」の目的と達成目標

(1) 「初等体育科内容構成研究」の目的

平成16年度に学部を改組し、新たに「初等体育科内容構成研究」の授業を立ち上げたときに、授業担当者が集まり、どんな授業にするかを話し合った。その結果「小

学校体育科の授業で取り扱う教材の特徴や取り扱い方などを理解し、指導者として必要な体育科の教材に関する基礎知識と技能を身につけること」が授業の目的に設定された。

「初等体育科内容構成研究」では、各領域の授業での学習体験を記録させふりかえらせることによって「教材についての考察」と「指導法についての考察」を学生から引き出すことを重視している。このうち、本授業では教材に関する知識や技能を身につけることに力点がおかれている。が、実際には、指導法に関する基礎的知識も同時に学ぶこととなる。学生達は小学校体育の授業で指導されている教材を実際に体験することで、教材の特徴から導き出される指導法の特徴へも目を向けるようになる。このことにより、教科教育に関する専門科目である「初等体育科教育法概説」での学習につながる視点を育てることが期待される。教育法の授業は初等教育開発主専攻及び副専攻の学生の必修科目であり、「初等体育科内容構成研究」を履修した学生の多くは、次学期に教育法の授業を履修する。

(2) 「初等体育科内容構成研究」の達成目標

平成22年度のシラバスに記述された「授業の達成目標」を以下に示す。

- a. 小学校体育科の各領域における教材の特徴を理解できる。(小学校体育科の基礎知識と教科指導法, 学校保健, 器械運動, 陸上運動, 球技, ダンス, 保健体育科教材分析力)
- b. 小学校体育科の授業における各教材の取り扱い方を理解できる。(小学校教育課程, 初等教科教材分析力)

() 内に示した項目は、本学部で使用しているプロフィールシートの階層3に相当する項目である。

3. 授業実践の実際

(1) 授業内容に関するガイドラインの設定

授業立ち上げに際しては、「初等体育科内容構成研究」でどんな教材を取り上げるかということも話し合われた。体育科においては、保健領域には教科書があるが、運動領域には教科書がない。そこで、中国四国小学校体育連

* 島根大学教育学部初等教育開発講座

盟が作成している体育科の副読本に着目した。本学部の学生は、卒業後、中国四国地区で教員になる者が多い。小学校教員を志望する学生ならば、この副読本に示されている教材に相当するような学習内容は指導できるようになるべきであろう、ということから、この副読本の内容をガイドラインとして、各領域の担当者がそれぞれ担当授業の内容を設定することになった。

(2) 平成22年度後期の実践例

本稿では、具体例平成22年度後期の授業実践例を報告する。平成22年度の場合、前期は主に初等教育開発専攻の3年生を中心とした33名が履修しており、後期は主に初等教育副専攻の1年生を中心とした48名が履修していた。後期の授業展開を表1に示す。

表1 平成22年度後期「初等体育科内容構成研究」の授業展開

10/4 オリエンテーション 担当:廣兼	11/15 器械運動 (鉄棒運動・跳び箱運動) 担当:境	12/20 表現運動 (中学年の表現) 担当:廣兼
10/18 陸上運動 (短距離走・リレー) 担当:齋藤	11/22 ボール運動 (投げる・捕る) 担当:中山	1/6 表現運動 (高学年の表現) 担当:廣兼
10/25 陸上運動 (ハードル走) 担当:齋藤	11/29 ボール運動 (運ぶ・トレーニングの運動) 担当:中山	1/17 保健 (健康な生活・身体の発育発達) 担当:西村
11/1 陸上運動 (走幅跳・走高跳) 担当:齋藤	12/6 ボール運動 (蹴球) 担当:中山	1/24 保健 (けがの防止・病気の予防) 担当:西村
11/8 器械運動 (マット運動) 担当:境	12/13 表現運動 (リズムダンス・フォークダンス) 担当:廣兼	2/7 ふりかえりとまとめ 学期末課題B 担当:廣兼

1) 表現運動領域における実践

このうち、筆者が担当した表現運動領域の授業実践例を紹介する。資料1に表現運動領域の単元計画を示す。これは表現運動領域の初回授業の冒頭に単元のオリエンテーションを行った際、学生に配布した資料の一部である。

資料1 表現運動領域の授業配布プリント

平成22年度 後期 初等体育科内容構成研究 授業資料(廣兼担当)

◎本単元の目標

- ◎小学校体育における「表現運動」領域の教材例を実際に体験し、教材の特徴と指導法の基礎について学ぶ。
- ◎小学校体育指導者が身につけておくべき「表現運動」領域の基礎的技能を身につける。

日程	12/13	12/20	1/6
テーマ別内容	<p>～やっぴゅうしんぎょなび遊びとダンスの教材～</p> <p>◎ダンス遊び(低・中・高学年)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○手遊び ○全身を使ったダンス遊び <p>◎ダンスダンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教材サンパ(中・高学年) ○おむかひびる・スキップ・封するのダンスでかけ跳びを組み合わせ <p>◎リズムダンスを踊ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○リズムの真発して動こう ○リズムを交わらなご <p>◎リズムダンスを踊ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教材ダンスの教材 ◎教材ダンスの教材 	<p>～やっぴゅうしんぎょなび表現教材 小遊守かきこ～</p> <p>◎教材ダンスとええおとこを踊る表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教材ダンスとええおとこを踊る表現 ◎教材ダンスとええおとこを踊る表現 <p>◎教材ダンスとええおとこを踊る表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教材ダンスとええおとこを踊る表現 ◎教材ダンスとええおとこを踊る表現 	<p>～やっぴゅうしんぎょなび表現教材 動きの組み合わせの工夫～</p> <p>◎教材ダンスとええおとこを踊る表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教材ダンスとええおとこを踊る表現 ◎教材ダンスとええおとこを踊る表現 <p>◎教材ダンスとええおとこを踊る表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教材ダンスとええおとこを踊る表現 ◎教材ダンスとええおとこを踊る表現

各授業の冒頭には、板書を用いて、学生にこの時間の授業で学習する事項は何かということ伝えてから授業を始めている。上記の授業では、技能の学習について、後述のように単元の学習を展開した。

第1時には、全身を大きく使ってリズムカルに動くことを学習内容とした。そして、全身を大きく使うためには「のびる」「ちぢむ」という運動から入り、「はずむ」「ひねる」「まわる」という動きを加えて3次的に体を動かすような学習過程を組むこと、次に、スキップや移動の動きを加えて、学習内容を身体の使い方から空間の使い方へとひろげていくことを解説した。

第2時では、前時で学習した身体の使い方のコツを復習した後、これらのコツは題材が変わっても応用できることを示してさらに運動の種類を増やし動きのレパートリーを拡大した。また、床を使った動きを取り入れて、空間の使い方をひろげることを示した。

第3時では、前時までに獲得した身体の使い方に加えて、動きの構成方法を学習した。具体的には「すばやく×ゆっくり」「激しい×静か」といった対比的な質の動きを組み合わせる方法を示し、動きの展開に変化や立体感を生み出すための構成方法を解説した。

また、指導法の学習については、全3時間を通して、これらの身体の使い方や動きの構成方法を学習するためにどんな教材を用いるかを解説した。また、それらの教材によって引き出された身体の使い方や動きの構成方法を学級全体で共有したり定着させたりするための手立てについても、実際に体験させ、課題の提示の仕方を解説した。

2) 「ふりかえりとまとめ」における実践

このようにして、学生達は、自らの活動体験を通して、教材が内包する学習内容や、学習内容に応じた指導法について学ぶ。本授業では、それらの学習成果を、領域を超えて一般化させ定着させるための手立てとして、「学期末課題A」と「学期末課題B」を設定している。

「学期末課題A」の書式を資料2に示す。

資料2 学期末課題Aの書式

初等体育科 学習の記録(学期末課題A)

授業題目: 初等体育科内容構成研究 年度: 平成 年度 学期: 前期・後期

領域: 記録者学生番号: 記録者氏名: 1/2ページに記入してください

記録者氏名を記入してください

授業実施期間: 月 日 ~ 月 日

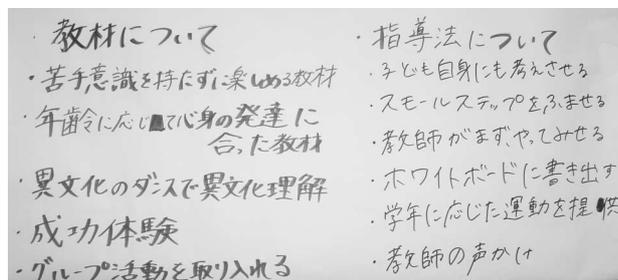
学習課題・活動内容	
教材や指導法等に対する考察	

*この「学習の記録」は各領域の授業が終わる毎に記録し、学期末課題Aとして二倍して提出します(「ふりかえりとまとめ」時に記録します)。

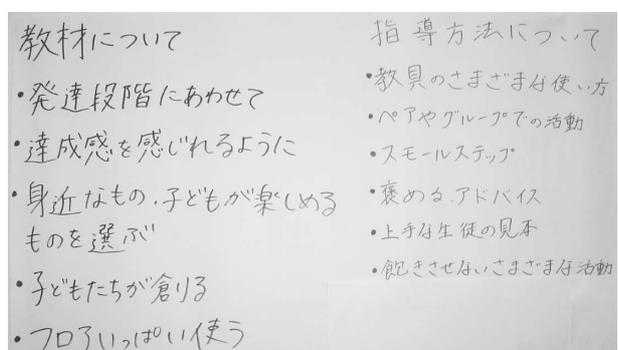
記録シートは、初回オリエンテーション時に学生に配布される。学生は、各領域の授業が終わるごとに活動ま

資料5と資料6に、グループでの意見交換により模造紙を使って作成した、学生の考える「授業で学んだことのまとめ」の典型例を示す。

資料5 授業で学んだことの例1



資料6 授業で学んだことの例2



これらの記述例からは、以下に示す学生達の2つの学習成果をみてとることができる。

第一に、学生達は教える側の視点に立って考察できていることがわかる。本学部における1年次の教育目標の一つに「教わる側から教える側への視点の転換」が掲げられているが、本授業においては、この目標が達成できていることがわかる。

第二に、学生がそれぞれの意見を各カテゴリーに分類した結果をみると、1年次後期の段階では教材に関する知識・理解と指導法に関する知識・理解とがまだ未分化な状態であることがわかる。しかしながら、記述の内容をみると、教材論・学習過程論・学習形態論・学習指導論などに関わる記述が多くみられる。学生達が、今後学ぶこととなる体育科教育学の観点からも、自らが授業で学んだ事柄を考察できるようになっていることがわかる。

これらのことから、「ふりかえりとまとめ」で実施した「授業で学んだこと」の考察は、教科内容の学習と教科教育の学習とをつなぐ役割を果たしているともみることができる。同時に、「授業で学んだこと」の考察を行うことによって、学生達には、2年次以降に学ぶ教科教育法の学習の基盤が形成されるのではないかと考えられる。

4. 今後の課題

本稿では「初等体育科内容構成研究」の授業実践の概

要を報告した。今後の授業改善に向けての筆者の当面の課題は「学期末課題A B」の評価基準の設定である。「教科教育法履修以前」の段階で、学生は何を・どこまで理解・考察できたらいののだろうか。そしてそれに対する評価基準をどう設定したらよののだろうか。それを考えることは、授業の到達目標をさらに吟味することでもある。4年間の教育カリキュラムを視野に入れつつ、この課題について考えたい。

本授業は、教科内容の学習と教科教育の学習とをつなぐ役割を果たすことも期待され実践されている。しかし、本授業はカリキュラム上、選択必修科目であるため、実際には、「初等体育科内容構成研究」を履修せずに「初等体育科教育法概説」を履修する学生も多い。そのような状況では、内容構成研究の履修経験のない学生に合わせた教育法の授業内容を展開せざるを得ない。授業者としては、内容構成研究の授業での学びを発展的に活かした教科教育法の授業を展開したいという思いはあるが、その実現には困難もある。

このような課題を抱えた現状ではあるが、授業実践のさらなる充実に向けて今後とも試行錯誤を続けたい。

注

1. このとりまとめ役担当教員（筆者）は、「初等体育科教育法概説」のとりまとめ役担当教員も兼務している。
2. 筆者はかつて平成17年度後期及び平成18年度前期の「初等体育科内容構成研究」受講者を対象に、第15回の授業時に学生が記述した自由記述による内省文の分析（参考文献1）を行った。その結果、学生が授業を通して学んだと考えている内容は「教授方法に関する知識・理解」「教材内容に関する知識・理解」が多いという事実が明らかになった。そこで、平成19年度後期以降は、ふりかえりの際、学生に「この授業で教材と指導法に関して自分は何を学んだと考えるかを記述するように」と提示している。

参考文献

1. 廣兼志保・平井章（2007）教育学部生による小・中学校体育に対する認識傾向。鳥根大学教育学部附属教育支援センター紀要第6号：77-93。
2. 高橋健夫他（2010）新版体育科教育学入門。大修館書店